Extended (or Cambodian) Mahāvaṁsa 訳註（九）

福田孝雄

第十四章[1]

正覚者[2]が般涅槃されて二百年後に、その島にかのマヒンダ（Mahinda）は教（法）を樹立させた。その城市では、その日にジェッタムーラ（Jeṭṭhamūla）の星祭りの（日）に至ったので、王は（それを）布告させるであろうと大臣達を招集させて『汝達、祭礼を布告せよ』と（命じた）。[3]かのデーワーナムピヤティッサ（Devānampiyatissa）王は、城市の住民達のために（ジェッタ月の）水祭りの準備をして、狩猟を楽しもうとして出掛けた。四万人[4]の人達に囲繞されて、（城市から出て）徒歩で進みながらミッサカ（Missaka）山にやって来た。[5]かの山の神は長老を（王に）逢わせようと欲し、牛耳鹿（go-kaṇṇa）の姿となって草を喰んでいた。王は（その鹿を）見て『このような無関心な（鹿）を射ることは相応しいことではない』と（考えて）弓の弦を弾いた。それで彼（鹿）はアンバッタラ（Anbatthala）の道を走って行った。彼（王）は、その跡を追跡しながらアンバッタラに登って行った。彼の王[7]は（鹿を）追跡した。かの鹿は逃れて長老の下に行き、遠くから長老を（発見するや）鹿は自ら（の姿を）消した。[8]かの長老は『（王は一時に）多くの（人びとを）見ては、ひどく恐れるであろう』と（考えて）『王は私のみを（見て）他の人びとを見ることなかれ』と考えて、直ぐに自らのみを見せた。遠方から来たマヒンダ（長老）は、王達の来るのを見て、『ティッサ（Tissa）よ、ティッサよ、ここに来なさい』とかの長老は言った。『ティッサ』と言う言葉を聞いて、王は恐れて思った。『この島で生まれた者で、ティッサと言う名前で（私を）呼べる者は誰もいない筈だ。この破れた黄衣を纏った似非沙門がティッサと言う名で呼んだのか。この者は一体誰なのか。人間かはたまた非人か』と。王のこのことを考えているのを長老は知って、彼にこう言った。『大王よ、

私達は法王の弟子であります。（人びとへの）憐愍のために[14]ジャンブディーパから此処に来たのです』と。長老の言を聞[8]いて、かの（王）は恐怖を去り友の伝言を想いおこして『（これらは）沙門である』と決定して、彼は弓箭を投げて、[15]かの聖者に近づいて長老と挨拶を交わし、その傍に坐った。[9]

時に彼の従者達がやって来て、（彼を）囲繞した。その時、[16]大長老は残りの朋友達を見せた。王は彼等を見て『これらの[17]（人びとは）何時（ここへ）来たのであるか』と（言った）。『私と一緒にです』と長老に言われて、彼はさらにこのこと[18]を問うた。『ジャンブディーパには、他にこのような行者達がいるのか』と。（そこで）彼は『ジャンブディーパ』は袈裟で輝いています。そこにはまた三明[19]（に通達するもの）達、神通力を具足するもの達、他人の心を熟知するもの達、天耳（を具足するもの）達、アラカン達、多くの仏の弟子達がいます』と（言った）。（王は）『（あなた達は）何によって此処に来たのか』と問うたところ、『私達は陸にもよらず水にもよらずして此処に来ました』と言った時、彼（王）は[20]『彼等は空中から来たのだ』と知った。

かの大賢者は（王の）知慧を考察するために、彼に問いを[21]発した。（その）問いの一々に、王は答えた。『王よ、この[22]樹は何と言いますか』、『この樹はアンバ（amba）と言う』、『この（樹）の他にアンバはありますか』、『多くのアンバ樹がある』、『このアンバ樹とそれらのアンバ樹の他にも樹が[23]ありますか』、『大徳よ、多くの樹がある。しかしそれらの樹はアンバ樹ではない』、『そのアンバとアンバでないものを[24]除いて（他に）樹がありますか』、『大徳よ、このアンバ樹が[25]（それである。）』、『王よ、あなたは賢者であります』。『王よ、あなたには親族がありますか』、『大徳よ、多くの（親族の）人びとがいる』、『王よ、（それ）以外に他の親族がありますか』、『大徳よ、彼等は（私）の親族より多くいる』、[26]『あなたの親族と他の（親族達）を除いて（ここには）他に誰がいますか』、『大徳よ、私のみである』、『善い哉、王よ、あなたは賢者であります』と。[27]（王は）賢者であると知って、大賢の長老は王に小象跡喩経（Cūḷahatthipadopama）を説[28]いた。（長老がその経を）宣説し終るや、彼（王）は四万人の人びとと共に（三帰）に住立した。

時に夕刻（に至って）王の食事の供養を（彼に）運んだ[29]が、彼はマヒンダ（長老）によって説かれた経を聞いて、[30]王は『今はこれら（の比丘）は食しないであろう』と知り、（しかし）『食するだろうことを問わないことは相応しくない』と思った。[31]（王は）『問うことこそ相応しい』と彼等聖者達に食事のことを尋ねた。『大徳よ、何を召し上りますか』と。（長老は）『私達は今食事を取りません』と。[32]このように言われた時に、かの王は『何時に（食事をなされるのか）』

と尋ねた。『暁明より正午まで（です）』と（長老は言った）。時を言われて[33](14)（王は）『私どもは城市へ行こう』と、このように言った。『大王よ、あなたはお出で下さい。私達は此処にとどまりましょう』（と長老が言った）。『そうであればこの童子（バンドゥカ）は、我々と共に行くべきである』[34]（と王は言った）。『王よ、この（童子）は果に到達し、教法を了解し、出家を望んでおりますから、私達の下にとどまります。今私達はこの（童子）を出家させるでありましょう。王よ、あなたは（城市に）お出で下さい』と。[36]（王は）『明朝、車を遣わしましょう。あなた達はそれに乗って城市にお出で下さい』と長老を礼し、バンドゥカを一方に導いて、彼[37]（の王）は長老のなそうとすることを尋ねた。彼は王に悉く告げた。『王よ、これら五比丘は煩悩を消滅するならば、大長老[38]達は大慧あり（煩悩を）破壊し無碍解であります』と。（王は）『長老達は已に得たのだ』と満足して『私にとって利益である』と考えた。バンドゥカは在家者であったので、疑惑[39]を去った王は（これらが）人間であることを知り『我々はこれらのものを出家させよう』と（言った）。長老はその村の結界内において、その時にバンドゥカ童子に出家具足戒を授[40]けた。彼はその刹那に、アラカン果に到達した。それから長老は、かのスマナ（Sumana）沙弥に呼びかけた。『聞法の時刻であると、汝は今布れるべし』[41]（と）。『大徳よ、どの位の範囲に聞えるように、私は告げましょうか』と（彼は言った）。『タンバパンニ全体に』[42]と（長老に）言われた時、『善い哉』[43](15)と彼は言った。沙弥は四禅の基礎定に入った。（四禅に）確立して出定して、三度自らの神通によって全ランカー島に聞えるように（聞）法の時刻を布れた。王は[44]ナーガチャトウッカ（Nāgacatukka）の岩の中の溜池の傍に坐って食事をしていたが、その音を聞いて、彼等大臣達を遣わした。彼等凡てのもの達は急いで行って礼拝をして尋ねて、『何か厄があるのですか』[45](16)(17)と言った。『厄はありません。正覚者の語を聞くべき時刻を告げられたのです』[46]と（言った）。沙弥の布[47]れの音を聞いて、地居の諸天は（これに）唱和した。かくの如くして次第にかの声は、梵界に昇っていった。かの声によって、諸天の大集会が行われた。長老はその集会の中において、等心経(18)（Samacitta-s.）を説いた。（そのために）無数の諸天が法の悟得を得、多数の龍、金翅鳥は（三宝に）帰依した。長老サーリプッタ（Sāriputta）がこの経を説いた時に、[49]無数の諸天の法現観があったのであるが、そのようにマヒンダ長老の（時にも）諸天の集会が行われたのであった。

王は翌朝、車を御者に準備させて遣わして、『方便のために汝はかの長老達のミッサカ山に急いで行け』と（言った）。彼（の御者）は車を準備して、ミッサカ山に駆って行き一方に立って、彼（の長老）に礼拝して、最上の長老に『車にお

乗り下さい。城市に参りましょう』と言った。[53]（長老は）『我々は車には乗りません。汝は行きなさい。我々は、汝の後から行くであろう』と言って、清浄な意念の大神通力者達は御者を返し空中に昇り、[54]城市の東方の第一塔所（Paṭhamatt-hūpaṭhāna）に降りた。[55]長老達が最初に降りた場所に建立されたチェーティ（支提）であるから、今日でもなお第一支提（Paṭhamacetiya）と呼ばれるのである。[56]御者を遣わした王は仮堂を造り、住所の内部には天蓋をもってよく荘厳した。[57]王宮の婦女達は、王より長老の徳を聞いて、長老に見えんことを願ったので、そこで王は王宮の地所内に美しき講堂を建立し、[58]白き帛布と華とをもって覆い、（種々なる）荘厳を完全になして、[59]（王は）長老の下で（長老達は）高（牀）に（坐ることを）離れることを聞いていたので、[60]『長老は高牀に坐るであろうかどうか』と疑った。かの（王が疑いの）思いを持ちつつある時に、かの御者は第一塔所の戸口に行って、かの長老達が衣を着けてそこに立っているのを見て大いに驚き、[61]行って王に『王よ、かの（長老達）が来られました』と告げた。[62]王は御者に『ところで凡ての長老達は車に乗って、[63]或は徒歩にて都にやって来たのであるか』と問うて、『王よ、車には（長老達は）乗られませんでした。また私の後から（やって来られたのですが）、今はもう東方の門に彼（の長老）達は、先に来ておられるのです』と。[64]（それを）聞いて『今、聖者達は、これらの坐牀を欲しなかった。立派な敷物を地に敷け』と命じ、[65]（王は）出合いの道を行って長老達に恭敬供養をした。マヒンダ長老の手から鉢を取り恭敬供養をし、長老を城市に招じ入れた。[66]占師達は設けられた座席を見て、このように予言した。『これ等の（比丘衆によって）地は占められ、（彼等は）島の主となりましょう』と。[67]王は彼等長老達を麗しき都城内に導いた。長老は設けの席を見て了知した。[68]（19）『ランカー島に確立せる勝れた師の教えは大地に敷きつめられて、不動のものとして確立するであろう』と。そこで彼等（長老）は分に応じて白布で覆われた坐牀に坐った。[69]王は自ら彼等に粥と硬軟の食を饗応した。食事が終った時に（王は）自ら（彼等長老の）近くに坐して、[70]王宮に住んでいる末弟の副王マハーナーガ（Mahānāga）の妃アヌラー（Anulā）を呼ばせて『これら長老達に敬礼供養をなすべし』と（命じた）。[71]かの妃アヌラーは五百の婦女達と共にやって来て、長老達を礼拝供養して一面に坐した。[72]食事の務めが終った時に彼（の長老）はとどまって、王と大勢の人びと及び婦女達と共なる妃とに智慧を具足せる大衆の集会において、[73]餓鬼事（20）（Petavatthu）、天宮（事）（Vimāna(-vatthu)）、（21）（四）諦相応（Saccasaṁyutta）とを説いた。[74]（それを）聞いて、五百の婦女達は第一果を得た。前日（長老達を）見た人びとから、長老の徳を聞いて長老達を見ようと欲して、城市

の多くの人びとは来集して、王[75]（宮の）門において遍ねく大声を挙げた。王は喚声を聞いて彼等（大臣）に尋ね、それを知り、王は（このように）思って大臣達をして、これを言わせた。『此処は凡ての人びとのためには狭すぎる。マンガラ[76]（Maṅgala）象の厩舎を浄めよ。これら都城の人びとはそこで長老達に見える（ことができる）』と。（彼等は）その象舎[77]を清めて、直ちに天蓋等によって荘厳し、分に応じて（長老達の）座席を設けさせた。かの長老はそこに赴いて坐し、か[78]の大説教者は天使経[22]（Devaduta-sutta）を説いた。来集した城[79]市の人びとはそれを聞いて、信仰を懐き、彼等の中の千人の有情が第一果を得た。ランカー島においてかの比類なき長老[80]は、ランカー（島）の休息処における師と等しく、二処において島の言葉をもって法を説き、かくして島の燈明は正法の相続をなしたのである、と。

善人の信仰と感激と（を起す）ために作られた大史中の「（マヒンダの）入城」と名づくる第十四章。

第十五章[23]

『象舎もまた混雑する』[1]と、そこに集った彼等感激せる人びとは、南門外の樹蔭[2]の深く涼しい青い芝生の王園内のナンダ林（Nandavana）に、長老達の座席を設けさせた。南門か[3]ら出て長老は、そこに（赴いて）坐った。法を熟知せる（長老）は、毒蛇経[24]（Āsīvisopana-sutta）を説いた。彼等のうち一[4]千の人達は第一果に到達した。その日より第二日にそこで二[5]千五百の人びとが、法の現観に達した。そこにやって来た多くの尊貴の家の婦人達は彼（の長老）を礼拝し囿園に満ちて[6]坐した。長老は彼女達に賢愚経[25]（Bālapaṇḍita-sutta）を説いた。彼女達のうち一千の婦人達は第一果を得た。かくの如く[7]その囿園に夕刻がおとずれた。『（我々は）あの山に行こう』と長老達は、そこから立ち去った。『長老達は直ぐに出[8]て行かれた』とかの人びとは言って、（王の下に）行って、[9]王に（そのことを）告げた。王は直ぐやって来た。王は（長老に）近づいて挨拶をして言った。『大徳よ、今はもう夕刻[10]であり、山は此処からは遠いのです。このナンダ園における住まいは快適です』と。（長老は）『（此処は）市に近すぎる[11]ために適わしくありません』と言ったので、（その）語を聞いて（王は）長老に、このように言った。『マハーメーガ林[12]園は近くもなく遠くもなく、樹蔭や水に恵まれて快適です。そこにお住みになり楽しんで下さい。大徳よ、引き返して下さい』と。（かくて）長老はそこに戻った。（長老が）引き[13]返したカダンバ[27]（Kadamba）河の近くの地に（後に）建立された支提は、ニワッタ（Nivatta 引き返しの）支提の名で呼ばれた。車駕の王者は、自ら長老達ナンダ園（の南の方角か[14]ら）右繞りしながら、東門のマハーメーガ林園に導いた。（[15]

王は）麗わしき王宮内のそこに、良き臥牀と坐牀とをよく整え整備させて、『此処に安楽にお住み下さい』と（言った）。[16]王は長老達を礼拝して、大臣達に囲繞されて城市に入った。彼等長老達は、その夜をそこで過した。

翌朝、[17]王は華々を携えて長老達を訪れ、礼拝をし華をもって供養して、『[18]如何でしたか。安楽にお休みなさいましたか。囿園は安穏ですか』と尋ねた。（長老は）『大王よ、安楽に休みました。囿園は行者に安穏であります』と。『[19]大徳よ、僧伽にはアーラーマ（ārāma 僧園）は認容されていますか』と彼（の王）は問うた。『認容されています』と適不適に精通せる長老は、竹林園（Veḷuvanārāma）の受納[29](29)にについて語った。それを聞いてかの大王は、大いに喜び満足した。[20]長老達を礼拝するために五百の婦人達と共に来た王妃アヌラーは、法話を聞いてその心に浄信をおこし、第二果に到達した。その時、[21]かの王妃アヌラーは出家したいと言う願いをもった。[22]（それで妃は）五百の婦人達と共に、このように言った。『王よ、今日もし望む（ことができる）ならば、私達は出家したいのです』と。[23](30)彼女の言を聞いて、かの王は長老に言うには『大徳よ、アヌラー妃は出家を望んでおります。尊師は（彼女を）五百の婦人と共に今出家させて下さい』（と）。（長老は王に）『大王よ、我々には婦人を出家させることは容認されていません。[24]パータリプッタに私の妹でサンガミッター（Saṅghamittā）の名で知られている比丘尼がおり、彼女は多聞であります。[25]王よ、沙門の王の樹王大菩提樹の南枝を携えて、同じ勝れた比丘尼達を、[26]王よ、ランカー島において以前王のために、三人の独存者である仏達の菩提樹が植えられたのです。[27]今日また、王よ、名声あるゴータマの光彩を放つために菩提樹が植えられるべきであります。（彼女が）来るようにと、私の父の許に（使者を）遣わして下さい。かの長老尼が来れば、これらの婦人達を出家させるでしょう』と言った。[28](31)『よろしい』と言って、王は最上の黄金の瓶を執って『マハーメーガ林囿園を僧伽に与えようと思う』と（言って）、[29]長老マヒンダの右手に水を灌いだ。大地は水が落ちた時、（王の）言葉と共にかの大地は、[30](32)二十四万ヨージャナの厚さまで遍ねく震動し大地は光り輝いた。[31]その希有なできごとを見て、恐れ驚愕し危惧せる王は、『[32]どうして大地は震動するのか』と問うた。（長老は）『恐れることはありません。[33]大王よ、十力の教えが此処に樹立するでしょう。だからこの大地は震動するのです。この場所は、最初の精舎の場所となるでしょう』（と答えた）。[34]大王はその言を聞いて、更に信仰を深めた。

[35]貴き人（王）はら、長老に素馨の花を献じたが、長老は王宮に赴いて、その南方に立っている棉樹[36](33)に八掬みの花を撒いた。[37]また大地はその如く震動したので、問われて彼（王）に

その理由を語った。『(過去)[39](34]三仏の時にも此処に円囲いの庭があったのです。王よ、今また僧伽の行事(の箇所が)あるべきでしょう』と。長老[40](35]は王宮の北の麗わしき浴地に赴き、そこにおいても同じ量の花を散じた。[41]その時また大地は震動したが、問われて彼(王)にその理由を語り、『王よ、この(池は)浴室づきの蓮池となるでしょう』と(言った)。[42]聖者は、かの王宮の樓門に赴いて、同じ量の花をその場所に供養した。[43]そこでまた大地が震動し、彼(王)のその問いに理由を語って『王よ、この劫中に(過去)三仏の菩提樹より南枝を採り来たって、[44]此処に植えたのです。王よ、私達の如来の菩提樹の南枝もこの場所に植えられるのでありましょう』と。[45]大長老はさらにマハームチャラ(Mahāmucala)の円囲いの庭に行き、同じ量の花をその場所に散じた。[46]その時また大地は震動したので、(彼の王に)問われて彼にその理由を語り、『王よ、此処に僧伽の布薩堂が設けられるでありましょう』と。[47]それから長老と共に行って、アンバンガナ(Ambaṅgana)に到った。良く熟した色も香りも味も最上の大きなアンバの実を、園丁は王に献じた。[48]王は長老に、その麗わしき(果実)を長老に捧げた。[49]人びとを利益する長老は(王に)坐ろうとすることを示したので王は直ちに最上の敷物を敷かしめた。[50]王はそこに坐せる長老にアンバを捧げた。長老はそれを食べて、アンバの種を王に与えた。[51]彼(長老)は『王よ、あなたはこのアンバの種を植えて下さい』と言った。王は自らそれを、その処に植えた。[52]長老は、その成長のためにと、その上で手を洗った。その刹那、その種子から発芽し、(若芽が萌え)次第に葉や果実をつけた大樹となった。[53]かの王と共にいる群衆も、その神変を見て身毛堅立し、長老達を敬礼しつつ立ち止まった。[54]その時長老は、八掬みの花をそこに散じた。その時また大地が震動したので、(彼の王に)問われて、彼にその理由を語った。『人間の主よ、この場所は来集した僧伽に献ぜられる種々の施物の配分する場所となるでしょう』と。[55]それより長老は四角堂(Catussālā)[56](36]の場所に赴き、そこにまた同じ量の花を散じたが、また大地は震動した。[57](王は)その震動の理由を問うたが、長老は凡てを説明して(言うには)『過去三仏陀の王の囿園を受納された時、[58]島の住民達が至る所から此処に施物を運び、三善逝と僧伽は(それを)お受けになったのです。[59]人間の主よ、今また此処に四角堂があるのでありましょう。此処には(また)僧伽の食堂が在るでありましょう』と。[60]

島の繁栄者であり場所の適不適に精通しているマヒンダ大長老は、(後に)大塔の建立された場所に赴いた。[61]その時王の囿園の囲いの内にカクダ(Kakudha)と呼ばれる小さな池があり、その上手の水辺に塔[62]に相応しい平地があったが、長老がそこに赴いた時、彼等は王に八籠のチャンパカ(Campa-

ka 瞻蔔）の花をもってきた。王はそれらのチャンパカの花を長老に献じた。[63]長老はそれらチャンパカの花をもって、その地に供養した。大地に花が落ちた時、大地はまたそのように震動した。（王は）その理由を問うたが、彼（長老）は順に（その大地震動の理由を）語った。

『大王よ、生類の利益のため安楽のため（過去）四仏の訪[65]れ給うたこの場所は、塔（の敷地）に適しています。この劫[66]において、最初に一切法に通じた師、一切世間の慈愍者である勝者カクサンダ（Kakusandha）（仏）がおられました。マハーデーワ（Mahādeva）と呼ばれる声聞の長老がおりました[67]が、彼（の仏）は空中によって一千の比丘達と共に行って私[68]が此処に来たように、デーワクータ（Devakūṭa）山に立たれました。（その時）このマハーメーガ林は、マハーティッタ（Mahātittha）と呼ばれ、アバヤ（Abhaya）と呼ばれた城市は、カダンバ（Kadamba）河の対岸の東にあり、そこにはアバヤ[69]王がいました。その時この島はオージャディーパ（Ojadīpa）と呼ばれていました。羅刹（rakkha）のために、そこの住民の中に熱病が流行していました。勝者カクサンダ（仏）は、[70]来られて観察されつつ、天と共なるかの衆生達が災厄に到っ[71]たことを仏眼によってご覧になって、遍ねく彼等の不幸を除去して、教法をこの島に樹立するために、慈悲の力に鼓舞さ[72]れて、四万の（比丘達に）囲繞されて、空中をやって来て、デーワクータ山にお立ちになりました。ここに正覚者の威力によって、オージャディーパの熱病はみな刹那に終熄したのです。人王よ、牟尼の王はその処にお立ちになり、『オージ[73]ャディーパの凡ての民は、今日私を見よ。我が下に来ることを願う人びとは凡て今日、四方より容易に速やかに来るがよい』と。直ちに王と市の人びとは麗わしきアバヤ市からみな[75]悉く出て、光りを放ち輝くこの牟尼の王と輝かされつつある[76]山とを見て、驚いて直ぐにやって来ました。天に供物を捧げ[77]ようとそこにやって来た人びとは、僧伽と共なる世間の導師を天と思ったのです。かの王は大いに喜び、かの聖王を敬礼[78]して食事に招待して、都城の近くに導き、僧伽と共に聖王の[79]坐するに適したこの麗わしく勝れた座席は障碍のない場所と思ったのです。王は立派な大講堂と坐牀とが作られた時に、[80]それに僧伽と共なる正覚者を坐せしめたのです。島の人びとは、此処に僧伽と共なる世間の導師の坐し給うたのを見て、[81]諸方から贈物をもたらしました。かの王は、自らの硬軟の食[82]と彼等がそれぞれもたらしたものによって、かの僧伽と共なる世間の導師を満足させ奉ったのです。かの王は食事の務め[83]が終った時に、（ここに）坐し給うた勝者のために立派な布施として、マハーティッタカ王苑（後のマハーメーガ林）を[84]捧げたのです。この時マハーティッタ王苑は時ならぬ花ばな[85]に飾られたのですが、仏によって（これが）受納されるや大

地は震動した。か[86]の導師は、この処に坐して法をお説きになり、四万の人びとが道果に達しました。勝者は、マハーティッタ林において日中の休息をなされて、夕刻、菩提樹（を植えるに）適した場所に赴かれて、そこに坐して定（samādhi）[87]に入り、そこから起って島の住民達の利益のために、このようにお考えになったのです。[88]『ルーパナンダー尼は（他の）比丘尼達と共に我がシリーサ（sirīsa）菩提樹から南枝を携えて来るだろう』と。[89](37)かの長老尼は、仏の心中を察して直ちにその都に近づいて、牟尼の王カクサンダ（仏）は仏陀の務めをなされつつ、オージャディーパに来られたが、ケーマ（Khemavatī）の都において、長老尼は彼（の仏）に近づいて、このことを述べたのです。[90](38)その時、輝ける黄金の瓶を作らせて直ぐに王を伴ってそこなる樹に近づいて、大神通力のある（長老尼）は[91]マノーシラー（manosilā）石をもって、南枝に線を引き、それを切り採って黄金の花瓶に挿し、大王よ、彼女は神通力によって五百の比丘尼達と共に、菩提樹を携えて、諸天に囲繞されてこのオージャディーパに来て、正覚者によって差し出された右手に黄金の瓶とともに置き、如来はそれを受け取り、アバヤ王に菩提樹を植えるためにお与えになったのです。王はこれをマハーティッタ王苑に植えたのです。[92]

正覚者はそこからまた北方に赴き、如来は美しきシリーサ[93]の円囲いの庭に坐って人びとに法をお説きになりましたが、その囲いの庭で二万人の有情が法を領解しました。勝者はさらにまた北（方）の塔に相応しき地に赴き、そこに坐って三昧に入り、定から起って、正覚者は群衆に法をお説きになりましたが、そこでまた一万人の有情が道果を得ました。如来は毎日供養し敬礼するために、人びとのために自らの漉水器（dhammakaraka）を与えられたのです。かのルーパナンダ（比丘尼）を、その従者と共にとどめておき、また弟子のマハーデーワを千人の比丘と共にその地にとどめて、正覚者、人牛王は快適なるオージャディーパにおいてさらにそこから東方に赴きラタナ（Ratana）道場に立たれて、人びとを教化して勝者は僧団を伴い空中に昇ってジャンブディーパに帰られたのです。[94]

この劫において第二番目に、一切知者であり師であり一切世間の哀憐者であられるコーナーガマナ（Koṇāgamana）と言う（仏）がおられました。このマハーメーガ林は、マハーノーマ（Mahānoma）と呼ばれ、城市は南方にありワッダマーナ（Vaḍḍhaamāna）と呼ばれていました。その時そこにサミッディ（Samiddhi）と呼ばれる王があり、その時この島はワラディーパ（Varadīpa）と呼ばれていました。その時このワラディーパにおいて旱魃の災厄がありました。かの勝者コーナーガマナ（仏）は、天と共なる世界において観察されつ[95]

つ、彼等[109]の旱魃を仏眼によってご覧になったのです。そしてこの島における災いを除去するため、最勝の教法を久しく樹立するため、慈悲[110]の力に鼓舞された（仏陀は）三万の比丘達に囲繞されて、空中を来てスマナクータカ（Sumanakūṭaka）山に立たれました。正覚者の威神力[111]によって、その旱魃は終熄し教法の滅亡は止み、雨は降ったのです。人王[112]よ、そこに立って聖王は『今日ワラディーパの人びとはみな悉く私を見るべきである。また私の下に来ることを願う人びとは悉く容易に速やかに諸方より来るべきである』[113]と（意に決し給うたのです）。その刹那に王と城市の人びとはワッダマーナ市から悉く出ていって、光り輝きつつあるかの牟尼王と光りに照らされつつある山とを王と凡ての市民とは見て速やかに近づきました。また諸天にバリ供養のために、そこにやって来た[114]人びと僧伽と共なる世間の導師を天と思ったのです。かの王[115]は大いに歓び、かの聖王を敬礼して食事に招待し城市の近くに伴ってきて、僧伽[116]と共に聖王の坐るに相応しい最上の麗わしきこの場所は『障碍のないところだ』と思われたのです。大地の主[117]は麗わしき講堂に、最も勝れ清浄なる坐牀を設けさせて、僧伽[118]と共なる正覚者を坐せしめ奉りました。世間の導師が僧伽と共に此処に坐されたのを見て、島民はあらゆる処から贈物[119]をもたらしました。かの王[120]は自らの硬軟の食物とそれぞれが持って来たものとを以って、世間の導師を僧伽と共に満足のいくまで奉ったのであります。かの（王）[121]は食事の務めが終った時に、（そこに）坐し給うたかの勝者[122]にマハーナーマ林遊園を勝れた贈物として捧げました。その時マハーノーマ林[123]は時ならぬ花に荘厳されていたが、仏によって受納されるや、大地は震動しました。かの導師[124]はそこに坐して法を説かれたのですが、その時三万の人びとが道果を得ました。勝者[125]はマハーノーマ林にて日中の休息をし、夕刻に以前仏陀の立った地に赴き、そこに坐して三昧に入り、それより起って島の住民達の利益のために、正覚者[126]はこのように考えられたのです。『カナカナンダー（Kanakanandā）比丘尼は諸比丘尼と共に、わが菩提樹ウドンバラ（udumbara）より南枝を持ち来るべきである』と。かの長老尼[127]はその（仏の）意中を知って、直ちにソーバ（Sobha）王の城市に赴き、ソーバワティー（Sobhavatī）の都において、そのことを知らせて[128]瓶を造らせて、そこの王を伴ってその樹に近づき、大神通力[129]ある（長老尼）は、マノーシラー石によって南枝に線を引きその切断され、黄金の瓶に入れられた菩提樹を、彼女は神通[130]力によって携えて五百の比丘尼と共に、諸天に囲繞されてこのワラディーパにもたらし、黄金の瓶と共にそれを正覚者の[131]差し出された右手に置き、それを如来は取られてそれからサ[132]ミッディ（Samiddhi）王に植えるために与えられ、大地の主[133]は（それを）マハーノーマ遊園に植えたのです。

正覚者[134]はそこからシリーサの円囲いの庭に赴き、ナーガ（Nāga）の円囲いの庭に坐って人びとに法を説かれたのです。大王[135]よ、そこにおいてその説法を聞き、法を領解した生類はその数二万でありました。大牟尼[136]は過去仏の坐し給うたかの場所に赴き、そこに坐して三昧に入り、それより起って正覚[137]者は衆のために法を説き給うたので、またそこに一万の生類が道果を得たのです。如来[138]は毎日供養し敬礼するために、かの人びとに腰帯を（遺品として）与え、そこに衆と共に比丘尼を残し、また仏弟子マハースマナ（Mahāsumana）を一千人の比丘と共に此処[140]に残して、ここより人牛王正覚者は麗わしきワラディーパのラタナマーラより此岸のスダッサナマーラ[141]（Sudassanamāla）に立って衆を教え、勝者は僧伽と共に空中に昇りジャンブディーパに赴き給うたのです。

この劫において第三番目に姓をカッサパ（Kassapa）と呼ぶ[142]一切知者であり師であり一切世間の慈愍者である勝者がおられました。マハーメーガ林はマハーサーガラ（Mahāsāgara）と呼ばれ、ウィサーラ（Visāla）と名づけられる都城は西方[143]に（ありました）。その時そこにジャヤンタ（Jayanta）と呼[144]ばれる王があり、その時この島はマンダディーパ（Maṇḍadīpa）と呼ばれていました。かのマンダディーパにおいて到る[145]所で大論争があり、論争のために多くの有情達が殺戮を行ったのです。その時ジャヤンタ王と弟との間に戦争が起り、大[146]勢の人が集ったのです。かの大勇カッサパ（仏）は、早朝時[147]に行かれて、有情達の阿羅漢となるべき機根を観察されて、その戦いによる生類達の大きな禍いを見そなわせられ、彼等[148]の恐怖を除いて久しい間この島に最勝の教（法）を樹立するために、慈悲[149]の力に押されて二万の比丘達に囲繞されて、空[150]中から来られてスバクータ（Subhakūṭa）山にお立ちになりました。人王よ、そこに立たれた聖王大牟尼は『マンダ島の人[151]びとは今日悉く私を見なさい。また私の下に来ることを願う人びとは悉くあらゆる方角から容易に速やかに来なさい』と（意に決し給うたのです）。直ちに島の住人達が悉く、マンダ[152]ディーパからやって来ました。スバ山において、光り輝き[153]つつある牟尼王と光りに照らされつつある山とを城市の人びとは見て、非常に驚いて、僧伽[154]と共なる世間の導師をナータ（Nātha）神と（思い）頭をもって礼拝し、王とかの弟とは畏[155]れて戦いを止め、牟尼の威光と威神力のために彼等は戦いを止めた。かの牟尼王を（かの王は）見て大いに歓び、敬礼して食事に招待して城市の近くに伴ってきて聖王の僧伽と共に[156]坐し給うに相応しき、最上の麗わしき場所は「障碍のないもの」と思った。大地の主は麗わしき仮堂と立派な坐牀とを作[157]らせて、ここにかの僧伽を伴っている正覚者を坐せしめ奉ったのです。世間の導師のここに僧伽と共に坐し給うのを見[158]て、島の住人達は四方から贈物をもたらしましたが、その王[159]

は自分のための硬軟の食物と彼等の持ってきたものとをもって、世間の導師を衆と共に満足させ奉った。[160]かの（王）は食事の務めが終った時に、そこに坐っておられる勝者にマハーサーガラ遊園を、最上の贈物として捧げたのです。[161]マハーサーガラ林には時ならぬ花が咲いて荘厳されていたが、仏によってこれが受納された時に、大地は震動したのです。[162]かの導師がそこに坐して法を説かれた時に、十万の人びとが道果を得ました。[163]善逝はマハーサーガラ林において、日中の休息をされ、夕刻に過去仏の立たれた所に赴き、[164]そこに坐して三昧に住し、それより起って正覚者は島の住民の利益のために思いをめぐらされたのです。[165]『スダンマー（Sudhammā）比丘尼は私のニグローダ菩提樹から南枝を採って、比丘尼達を伴って今来るべきである』と。[166]かの長老尼はかの（仏の）心中を知って、直ちにバーラーナシーに行って、キキー（Kikī）王に告げた。[167]（その）比丘尼は輝やける黄金の花瓶を造らせて、そこに王を伴ってその樹に近づき、[168]大神通力者（の長老尼）は、マノーシラー石にて南枝に線を引き切断されて黄金の瓶に挿された菩提樹を、[169]彼女は神通力をもって運び、五百人の比丘尼と共に諸天に囲繞されて、マンダディーパにもたらしたのです。[170]正覚者の差し出された右手に黄金の花瓶と共にそれを置いて、それを如来が取られて、[171]それを植えさせるためにジャヤンタ王に与えられたのです。大地の主はマハーサーガラ遊園に（それを）植えさせたのです。[172]それから正覚者は北の方にあるナーガの円囲いの庭に赴き、アソーカの円囲いの庭に坐して、人びとのために法を説かれたのです。[173]その法話を聞いて、凡ての人びとは満足し、四千の（生類が）法を領解しました。[174]大聖は過去仏の坐し給うた場所に赴き、そこに坐して三昧に住し、それより起って、[175]正覚者は僧伽のために、そこに法を説かれたが、一万の生類が道果に達しました。[176]守護者は資具の一つである最上の洗浴衣（jalaṣāṭika）を、[177]かの人びとの供養と恭敬のためにお与えになったのです。スダンマ比丘尼を随伴者と共にそこに残して、また仏弟子のサッバナンディ（Sabbanandi）を一千の比丘と共に[178]そこに残して、正覚者は心地よきマンダディーパにおいて、そのスダッサナマーラ（Sudassanamāla）の此岸に立ち給うて、[179]守護者はかの円囲いの庭において人びとを導いて、勝者は僧伽を伴って空中に昇り、ジャンブディーパに行かれたのです。[180]この劫において第四番目に一切法を領解した師であり一切世間の慈愍者である勝者ゴータマが在しました。[181]最初彼（の仏）は此処に来て夜叉達を調御され、二度目に来て龍達を調御されました。[182]カリヤーニー（Kalyāṇi）河のマニアッキカ（Maṇiakkhika）竜に招請されたが、かの正覚者は沈黙の状態によって受諾されました。[183]三度目に来島して五百の比丘と共に、カリヤーニーの地で竜によって満足させられて食事をさ

れ、以前菩提樹の立った所に、この塔の地と受用物舎利（pa-[184]ribhogadhātu）の地にも坐禅を享受され、三界の燈明、両足尊、人牛王なる大牟尼は、過去仏の立ちたる地の此方に立た[185]れ、その時人間のいない所に人間の状態によって来られて、[186]島に住む天衆と竜とを調御し、僧伽を伴って空中に昇り勝者はジャンブディーパに戻られたのです。

王よ、かくの如く四仏は常にこの場所を訪れ給うたので[187]す。大王よ、将来この場所には塔があるでありましょう。仏[188]陀の舎利一ドーナを安置し高さ百二十肘あるヘーママーリー（Hemamālī）として知られるでありましょう』と。

『私こそ（この塔を）建立するでしょう』と大地の王者は[189]このように言ったが、『大地の主よ、あなたには他に多くの務めがあります。十分あなたにより塔は作られました。王[190]よ、今日この島においては、あなたによって多くの福と多くのことがなされなければなりません。それらを作して下さ[191]い。あなたの子孫はこ（の塔）を建立するでしょう。あなたの兄弟の副王マハーナーガの子であるヤッターラヤカティッサ（Yaṭṭhālayakatissa）が将来王となり、ゴーターバヤ（Goṭhā-[192]bhaya）と名づける彼の息子が王となるでしょう。彼の息子[193]はカーカワンナティッサ（Kākavaṇṇatissa）と呼ばれるでしょう。王よ、かの王の息子は大王となるでしょう。ドゥッタガ[194]ーマニー（Duṭṭhagāmaṇī）の名によって知られるこの大威力あり神通力あり勇猛なるアバヤは、此処に塔を建立するでしょう』と。

か[195]の長老の言葉を聞いて王は満足し、彼は『大徳よ、もし私の子孫が此処にそれを作するならば、私によってランカディーパにおける事業は作されたことになります』[196]と言った。長老の語によって大地の主は石の柱を建てて、石の柱に（その事を）次の如く記さしめた。『デーワーナンピヤティッサ[197]王の子孫の王子は将来ドゥッタガーマニーと呼ばれる王となるだろう。（彼は）清浄なるランカーの生類の繁栄のために[198]塔を建立するだろう』と。大慧あり光輝あるティッサ王は、[199]石の柱と麗わしきマハーメーガ林とティッサ園を（長老に）与えた。大慧あり大神通力あり、不動のマハーマヒンダ長老[200]は（それを）受納し、八箇所において大地を震動させた。翌[201]日長老は受領（の時）に到ったので、その時内衣を着し大衣を被った。行乞のために海のような都に入って王宮において[202]食事をして後、宮殿から出て、ナンダ林に坐して、そこで火[203]聚喩経（Aggikkhandhopama）を衆のために説き、そこで一千の人びとを道果に達せしめて、マハーメーガ林に止住した。第三日に長老は王宮にて食事を摂り、ナンダ林に坐して蛇喩[204]経（Āsīvisūpama）を説き、一千の人びとを悟得に到らしめ[205]て、それより（マヒンダ）長老は、ティッサ園に赴いた。法を聞いたかの王は長老の傍に坐して問うた。『大徳よ、勝者[206]

の教（法）は樹立されましたか』と。（長老は）『いやまだそうではないのです。人びとの王よ。布薩などの作法のために勝者の定めに従って、人王よ、此処に結界（sīmā）が設定される時に、教（法）は樹立するでありましょう』と。[207]かのマヒンダ（長老）は結界の設定されることを欲しつつ、夕刻に王にこのように言った。[208]『私は正覚者の定めの下に住みましょう。光輝ある人よ、故に速やかに都城内に結界を設けなさい。我々はそこに結界の達する場所を知るでしょう』と。[209]『よろしい』と言って大地の主はナンダ園から出る諸天の王のごとく、楽しきマハーメーガの林から自が宮殿に入った。[210]

早朝大鼓を（打たせて触れ）廻らせ、最高の都と精舎に到る道と精舎とを凡て荘厳させて、[211]かの車駕の主、車乗の人、すべての荘厳を保持する人、大臣を伴える人、内宮を伴える人、戦車と軍勢と運搬獣とを伴える人は大勢の従者と共に自が園林に入った。[212]そこに行って礼拝に価する長老達を礼拝し、長老達と共に河の上流の渡し場に行って、そこより黄金の鍬を携えて（結界）線を耕しつつ来た。[213]精舎と僧房とを右繞しつつ、結界に達する場所の河に到って終った。[214]王の与えた（結界）線によって標を明確にし、三十二の円囲いの庭と塔園とのために（結界）相を明らかにし終って、[215]それら凡ての場所を検討して、標を明確にするや、大賢の大長老は、法に従って結界内の標を明確にし、聖者はその同じ日にあらゆる結界を定めた。[216]結界決定の事が終った時、大地は震動し、山の王がかがんだり凡ての希有なることは、（結界）承認の声となって顕現した。[217]

第五日に長老は王宮において食事を摂り、ナンダ林に坐して大衆のためにカッジャニーヤカ（Khajjanīyaka-sutta）を説き、[218]そこで一千の人びとを阿羅漢果に達せしめて、マハーメーガ林に住した。[219]

第六日目においてもまた長老は王宮で食事を摂りナンダ林に坐して、説法に通ぜる人は牛糞塊経（Gomayapiṇḍika-s）を説き、[220]一千の人びとを三道に達せしめ、マハーメーガ林に住した。[221]

第七日目に長老は、王宮中で食事して、ナンダ林に坐して転法輪経（Dhammacakkappavattana-s）を説いて、[222]一千の人びとを三道に到らしめ、マハーメーガ林に住した。[223]第二日より第七の経まで一つずつ毎日彼（の長老）は説いて、[224]一千の生類をかの大慧の人は毎日法の領解に到らしめた。[225]かくの如く（長老）は教（法）を顕示して園林を光輝ある場所に（したため）ジョーティ（Joti）林の名称を得た。[226]彼（の王）は適意のジョーティ林に僧房を造らしめたので、（彼の名をとって）ティッサアーラーマと言う名称によって僧房は有名になった。[227]大地の主（王）は先ず手で水を撒いて長老に与え、杖の炬火により粘土を速やかに乾かしてそれからティッサ園に[228]

(40) カッジャニーヤカ（Khajjanīyaka-sutta）を説き、そこで一千の人びとを阿羅漢果に達せしめて、マハーメーガ林に住した。

(41) 牛糞塊経（Gomayapiṇḍika-s）を説き、一千の人びとを三道に達せしめ、マハーメーガ林に住した。

塔を造らしめた。塔はローハ（Loha）塔と同じく黒色に輝や[231]き、黒重閣舎（Kālapāsāda-pariveṇa）と言う名称を得た。そ[232]れより（王は）大菩提寺（Mahābodhighara）、青銅殿（Lohapāsāda）及び籌[42]食堂（Salākagga）と食堂（bhattasālā）を完全に建立させた。多[233]くの房舎、立派な（沐浴のための）蓮池、夜間処、昼間処などを王は造らしめた。か[234]の悪を洗いたる人の沐浴すべき池の畔の岸にある房舎はスンハータ（Suṇhāta）房舎と呼ばれた。か[235]の善良の島の燈明（長老）の経行所におけるかの房舎は、ディーガチャンカマナ（Dīghacaṅkamana 長経行）と呼ばれた。か[236]の長老が最高の果（を得る）等至定に入った場所であるから、これはパラッガ（Phalagga）房舎と呼ばれる。か[237]の長老がそこで依倚物に凭れて坐した所（に建てられた）から、その後にこれはテーラパッサ（Therapassa 長老凭れ）房舎と呼ばれる。多[238]数の天衆が彼に近づいて坐した場所は、そのためにこれはマルガナ（Marugaṇa 群神）僧房と呼ばれる。デ[239]ィーガサンダナ（Dīghasandana）と称せられるかの王の将軍は、（長老のため）八（本）の柱によって小塔[240]楼を建て、凡ての仕事が終了した時、最高の長者を導いてそこでマヒンダ（長老）の資助者にその重閣を与えた。そ[241]こにかの勝れた第一人者の富の源たる房舎をディーガサンダ将軍房舎（Dīghasandanasenāpati-pariveṇa）と呼んだ。その名に天[242]愛（Devānampiya）の語を冠するこの（善意の）王者（ティッサ）は、ランカー（島）にティッサアーラーマと称する自[43]が名と同じ大寺を、彼の林のジョーティワナと称する美しき森林に、マヒンダ長老のために造[243]らしめて、（長老を）恭敬して手によって水を注ぎ大賢なる人、善慧ある人、大地の如く動揺せざる人は（長老）に与えた。[244]

善人の信仰と感激と（を起す）ために作られた大史中の「大精舎の受納」と名づくる第十五章。

註

（1）本書は八十偈からなっているが、Mhv. では六五偈であるから、一五偈が加えられている。この章は Dpv. では第一二章四四偈から八六偈までと、第一三章一〇偈までの箇所に相当する。

（2）本書の第一、第二の偈に相当するものは Mhv. にはなく、Ṭīkā などにある一部の記事から創作したもの。

（3）第三偈は Mhv. の第一偈で以下第四、第五偈は Mhv. の二・三偈に相当する。

（4）第六偈は三行詩で、内容上は Mhv. 第四偈に相当するが、記述が異っている。

（5）第八偈は三行詩で、Mhv. 第六偈と共通するところは、一行目の偈だけであり創作による挿入がある。

（6）第九～一二偈までは、Mhv. 第七偈の内容及び Ṭīkā などから構成されたもの。

（7）第一三偈は三行詩で、二・三行目が Mhv. 第八偈に当る。

（8）第一四偈は Mhv. 九偈に近い。
（9）第一五～二八偈までは Mhv. 第一〇～二三偈に相当する。
（10）第二六偈は Mhv. 二一偈とほぼ同じいが、数箇所異なる。
（11）Cūḷahatthipadopama は Dpv. では hatthipada と出ている。(Dpv.XII-57)
（12）第二九偈の一行目は Mhv. 二四偈一行目に相当する。二行目は Mhv. には無く創作による挿入。
（13）第三〇偈の一行目は Mhv. 二四の二行目の詩。三〇偈二行目～三二偈までは Mhv. 二五偈及びその Ṭīkā によって構成されたもの。
（14）第三三～四二偈までは Mhv. 二六～三四偈とほぼ一致するが、処々に二・三の語句や一行詩などの挿入がある。
（15）第四三～四四偈の一部が Mhv. 三五偈に相当するが、他は Ṭīkā などから補って創作したもの。
（16）第四五～六六偈までは Mhv. 三六～五三偈に相当するが、随所に三行詩など変形詩、や語句の挿入があり、Ṭīkā からの引用も含まれる。
（17）Nāgacatukka はミッサカ山中の池で、Nāgapokuṇa であるとする。(Mhv. tr. P.94 註二)
（18）等心経は、A. I.pp63-5 の Dukanipāta 中の Samacitta-vagga の五―六経 (Mhv. tr. P.94 註二)
（19）第六八偈は三行詩で Mhv. には相当する箇所がないが Ṭīkā の内容と二・三の語を除き殆ど同じ
（20）餓鬼事・天宮事はパーリ小部中に含まれる。
（21）諦相応 (Sacca-saṁyutta. S. 56, 1～131)
（22）天使経 (Devadūta-sutta. M. 130)
（23）第十五章は本書では全二四四偈であるが Mhv. では二一四偈であるから、三〇偈が加えられている。Dpv. xiii.11～64, xiv.1～49 が相当箇所である。
（24）毒蛇経 (Āsīvisopama-s.)S. 35, 197.
（25）賢愚経 (Bālapaṇḍita-s.)M. 129.
（26）第一二偈は Mhv. 八偈の一部と九偈の一部により構成される。
（27）カダンバ河はアヌラーダプラの東方に流れる河で、Malvatu Oya と現在呼ばれている。
（28）第一三～二二偈の一部は Mhv. 一〇～一八偈に相当する。殆ど同文。
（29）ビンビサーラ王が仏陀に竹林園を奉献した故事のこと。(Mv. I.22. Dhp. A. I.74) その他四分律三三、五分律一六等にも存す。
（30）第二三偈は三行詩、Mhv. 一九偈の一部を引いて構成されている。
（31）第二八及び二九偈は Mhv. には相当する箇所がない。
（32）第三三及三四偈は Mhv. に相当する箇所はない。
（33）棉樹 (Picula) は tamarisk 樹
（34）現劫の過去三仏 (Kakusandha, Koṇāgamana, Kassapa) に関する来島の伝説が順次、同じスタイルで語られる。
（35）第四〇偈～八九偈までは Mhv. 三〇～七八偈にほぼ相当するが、何箇所か三行詩の変形や補足、挿入の箇所がある。
（36）四角堂 (catussālā) は Mahāvihāra の一部に属し、僧伽

の食堂として使われる。

(37) Rūpanandā は Mhv. 及び Dpv. xvii, 16, 51ff では Rucānandā とある。

(38) 第九〇～九二偈に相当する箇所は Mhv. にはない。

(39) 第九三偈～一九四偈までは Mhv. 八〇偈～一七二偈までの偈に順じているが処々に三行変形詩や語句の挿入が見られる。

(40) 応噉経 (Khajjanīyaka-s.)S.22, 73～82 の中の 78,79 Sīha-s.

(41) 牛糞塊経は S. 22,96

(42) 籌食堂は切符によって食物の配分を受ける室。

(43) 第二四三及二四四偈は Mhv. に相当する箇所はない。